コリント人への手紙一 16:21-24 どうしようもない教会へのパウロの愛

今日、コリント人への手紙第一の最後のメッセージに来ました。コリントの教会は多くの問題を抱えていました。この書を通してそれは明らかにされています。これらの問題を思い起こすために聖書個所を検証していきます。第一章の初めの十節に入ると、パウロはこの教会の体に存在するように思われる深い亀裂についての取り組みを始めます。彼は教会にキリストが彼らにキリストにあって一致することを望まれている事を考えるように懇願します。*コリント人への手紙 第一 1 章 10 節* でそれを見ます。*10　さて、兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ることを一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。* 教会内のこれらの不一致は使徒たちや教会の指導者たちを中心に展開しており、教会員たちそれぞれのお気に入りの教会のリーダーと彼らを重ね合わせて、その他のリーダーたちに従う人たちと対立していました。そして、4 つの章を費やした後、その議論 を締めくくります。彼自身の使徒としての権威の考察から教会の次なる問題、性的不道徳に移ります。*コリント人への手紙 第一 4 章 21 節~5 章 2 節　21　あなたがたはどちらを望みますか。私があなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。 1　現に聞くところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。 2 それなのに、あなたがたは思い上がっています。むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。*これはとても重大な問題でした。パウロは優しく穏やかに語り掛けたかったのですが、彼はこの性的不道徳を犯しているこの男についての話を明らかにする時、遠回しな言い方はせず、5 章 13 節ではっきりと言いました、*コリント人への手紙 第一 5 章 13 節　13　外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」*

教会内での罪の容認と分裂の話し合いに多少関連して、彼は次に信者同士の訴訟問題を取り上げ、そして、一人の男性の性的不道徳を犯す問題から全般的な性的不道徳の問題に広げていきます。*コリント人への手紙 第一 6 章 18~20 節　18　淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。 19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。 20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。* そして、パウロは結婚制度を性的不道徳の解決策として提案しています。*コリント人への手紙 第一 7 章 2 節　2　淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。*8 章で、パウロは彼に送られてきた偶像にささげられた食べ物に関しての質問に基づいた議論を始めます。私たちの権利とそれらの権利をキリストのために放棄する事への着目も含まれています。彼自身についての考察での鍵となる考えは*コリント人への手紙 第一 9 章 19~23 節* です。*19　私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。 20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには――私自身は律法の下にはいませんが――律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。 21 律法を持たない人たちには――私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが――律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。 22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。 23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。*

パウロがコリント人への手紙一 10 章 23-24 で彼の議論を締めくくろうとする時、偶像へ供えられた食べ物の適用が見られます。*コリント人への手紙 第一 10 章 23~24 節　23「すべてのこ*

とが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。 24 だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。

教会を分裂に導くと同じ自己中心的姿勢は、たとえ私たちが何を食べるかと言う小さなことでさえ、私たちの願望や自己利益に基づいた選択によって他の人に害を及ぼてしまうことあります。礼拝で頭の被り物をする女性と主の晩餐を皆で与ることに焦点を当てることによって、11 章はいわばそのテーマの上に築かれています。頭の被り物はキリスト以外の誰れでもなく、キリストに焦点を保つようにすることについて、また、キリストについて宣言する、主の晩餐も同じで、ある人の富と他の誰かの富との比較ではありません。*コリント人への手紙 第一 11 章 26 節*はこれをこう言って確認しています。 *26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。*

この他の人にへの無償の奉仕は霊的な賜物とそれらを教会において私たちがどのように奉仕するために用いるかの考察によって締めくくられます。この議論のクライマックスは*コリント人への手紙 第一 13 章*です。*1~3 節　1　たとえ私が人の異言や御使いの異言で話しても、愛がなければ、騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じです。2 たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。 3 たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても、愛がなければ、何の役にも立ちません*。

そして互いへの愛に根差している私たちの賜物の最終用途は私たちが規律正しく、秩序正しく礼拝する事によって教会全体を築き上げるのです。*コリント人への手紙 第一 14 章 26 節*　はこの議論をこのように終わらせています。26 節は言います。*26　それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょう。あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。*そして 40 節、*40 ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい。*

最後に、パウロが信者の復活は嘘であると言っている偽の教師たちに彼が反論しつつ取り組んでいる主要な問題の最後を含んでいる 15 章に来ます。私たちの復活の真実はキリストの復活の真実を軸としています。*コリント人への手紙 第一 15 章 20~22 節　20　しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。 21 死が一人の人を通して来たのですから、死者の復活も一人の人を通して来るのです。 22 アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。*16 章での一連の挨拶と指示の後に、この書の終わりとなる最後の言葉に来ます。*コリント人への手紙 第一 16 章 21-24 節　21　私パウロが、自分の手であいさつを記します。 22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。 23 主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。 24 私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。*

パウロが彼の書簡をこれに似通った言葉で締めくくることは珍しいことではありません。パウロのように彼の生涯で多くの執筆をした人は、この当時の普通の習慣として、彼自身で筆記する代わりに彼の言ったことを何でも筆記する書記を使いました。そして歴史的に見てもこの書記は自分の好きなように筆記するのではなく、パウロに伝えられた通りに書き、このパウロの手書きの覚書は彼がこれらは間違いなく彼の言葉であることの保証を与えることと同等でした。パウロはガラテア人への手紙 6 章 11 節で彼がどのように大きな字で書いたかを指摘しています。*ガラテア人への手紙 6 章 11 節 11　ご覧なさい。こんなに大きな字で、私はあなたがたに自分の手で書いています。*

パウロの視力が悪かったことが彼が書記を用いていた理由の一つかもしれません。しかし、何であれ、彼の手書きの最後の覚書は書簡全体の承認を示していました。しかしそれだけではありませんでした。彼が自身で手書きした言葉は彼が実際読者に伝える事を望んだメッセージを告げていました。彼のコリントの信徒への最後の手書きの覚書には三つの重要な点があります。
一つ目は実際に呪いです。***主を愛さない者はみな、のろわれよ。***
この書ですでに詳しく列挙しただらしなさや罪を思い出してください。. キリストのための愛が教会の健全さの最終的な解決法として教会を特徴づけるべきです。ですから、彼は強い言葉を用いて何が最も大切であるかを見失っている人たちに呼びかけています。彼はすぐに最初の陳述に***主よ、来てください。***という言葉を結び付けています。彼はこれをアラム語の言葉、マラナタと実際記しています。二つは繋がっているのは、主が戻られる時、彼は裁く方として来られます。来るべき王である裁き主への愛のために奉仕するために生きる事が私たちの人生を永遠の目的によって真に生きる唯一の道です。そのキリストへの愛はキリストの再臨の切望です。キリストの再臨は私たちに恐怖で身をすくませるのではなく、私たちを主に仕えるよう奮い立たせるはずです。しかし、もちろん、聖書が極めて明白にするように、私たちはパウロの次の陳述にあることなしには私たちの人生をそのように生きる事は決してできません。***主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。***再三再四この真理を繰り返します。***ローマ人への手紙 3 章 23 節 23　すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、***

私たちは神に従順である事によって神に栄光を帰すために創造され、そして、神を愛するように命令されていますが、私たちは全員それができていません。しかし、パウロは繰り返し彼の筆記を通して恵みという言葉を強調しています。神に対して罪を犯した私たちには相応しくない神の好意です。読者の生涯における神の恵みを指し示すことはパウロの書簡の共通した終わり方ではあるものの、私たちは決して単にこの言及を見過ごしてなりません。私たちが今日手紙やメールの結びの言葉として使う親愛なるやクリスチャンの手紙で用いる blessings のような結び分と同様に考えてしまいがちです。しかし、恵みはパウロの人生を特徴づけており、クリスチャンとしての私たちの人生も特徴づけるべきです。　***コリント人への手紙 第一 15 章 10 節***　で彼が　どう言っているかを見てみましょう。***10　ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。***

あなたがまだイエス・キリストをあなたの主として救い主として受け入れていらっしゃらなければ、あなたは今日神の救いの恵みを必要としています。私たちが神を真に愛して、神の怒りの下から逃れる唯一の方法は、神の恵みによってのみ来る罪の赦しを経験することです。それを獲得することはできません。買うこともできません。イエス・キリストへの信仰によってのみ受けることができるのです。***エペソ人への手紙 2 章 8~9 節　8 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。 9 行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。***

神の恵みがパウロを変え、神の恵みが私たちを変え、教会を変えます。私たちを変え、神の御子イエス・キリストに従うようしてくれる神の恵みから離れて霊的に健全な教会も人もありえません。その変えられた人生が神への愛と他者への愛を生むのです。パウロの人生の神の恵みがその明らかに問題山積の教会への最後の言葉に導きます。***24　私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。アーメン。***
私がこの説教の冒頭からこの書全体の概要を通して再検討した理由はパウロが取り上げなければいけなかった問題のすべてがこの教会をどうしようもない教会にしていたことを思い起こすためです。パウロが対処する必要があった多くの問題の後、彼は単にこの教会から手を引くか、教会の更生のために厳しい言葉を送ってこの書簡を終えればもっと簡単であったでしょう。彼の書簡の結びで恵みに焦点を置くことはよく見られました。しかし、愛が中心であることは他にありません。この分裂した不健全な教会に対して、パウロはこの教会を構成する信者たち全員のための

深い愛情を示す言葉で締めくくります。そこには、さまざまな派閥に分かれて互い内輪もめする人たちも含まれています。不道徳な人を教会から除籍することを反対した人たちも含みます。パウロの指示を拒否して教会礼拝でリードするとき、頭の被り物をはずすことによって社会規範を破った女性たちも含みます。パウロが正した誤った復活の教義を教えていた人達さえも含んでいます。最後に激しい非難の言葉の方がふさわしかったこの教会への彼の愛は、彼のこの書で用いなければならなかった厳しい言葉の裏にある彼の心を示しました。彼の言葉はこの教会と人々のための愛の証明として記されたのです。
よく考えてみると、愛は 13 章を頂点にしたこの書の主要な焦点でした。パウロはこのどうしようもない教会の問題の最重要な解決策は教会の他の人たちを愛することであると言わんとしていました。そして、パウロは終わりに彼自身の彼らへの愛を彼自身の言葉によって表現することによって強固にしています。パウロは彼らに彼自身の手本によって教会はある人たちのためではなく、完璧な教義の信条を持つ人たちだけではなく、正しい使徒に従っている人たちだけではなく、全員のための場所であることを示すことを望んでいました。常に教会のために正しい決断をする人たちだけではなく、指導者たちや教会の全員が見ることができる傑出した賜物を持っている人たちだけでもなく、全員がキリストの体に表現されたキリストの愛を感じることができるべきです。***24 私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。アーメン***と言って終わります。こうしてどうしようもない教会は健全な教会になり、教会のかしらである、イエス・キリストに栄光を帰します。私たちはそのような教会でしょうか。YIBC は堂々と神の御言葉の真理のために大胆に信仰によって固く立つだけではなく、他の人たちにしっかりと態度で表し、彼らが愛されていること、大切に思われている事、真にキリストの体の部分であることを知るようにもしているでしょうか。神様が御自身の栄光のために私たちをそのような教会にしてくださるように、そしてキリストの再臨の日まで私たちをそのように保ってくださいますよう。祈りましょう。
コリント人への手紙第一のこの書を締めくくり、互いに愛し合うことに焦点を置くとき、聖餐式に共に与るほどふさわしい終わり方はありません。
この食事はイエス・キリストにあるからこその私たちの一致を表しています。私たちは様々な背景、生い立ちから来ていますが、主の十字架の下では、私たちはみな同じです。私たちはみな罪びとであり、その私たちが主にあって一つになれるように、進んで私たちの代わりに血を流し、死んでくださった救い主イエス・キリストを必要としています。私たちはみな同じように神の御許に来ます。キリストを主として救い主として信じることによって、主の義を通して罪の赦しを受けます。あなたがイエス・キリストをあなたの主として救い主として受け入れ、従順に最初の信仰の一歩としてバプテスマを授かっていらっしゃるならば、是非今日のこの主の晩餐に私たちと共に与ってください。あなたがまだ、キリストを知らないか、バプテスマを授かっていらっしゃらなければ、参加は遠慮ください。親御さんはお子さんがまだ準備が整っていなければ、この食事の重要さを教えるために参加させないでください。私が祈った後に執事が礼拝堂の四隅でパンと杯をお配りします。前回と同様ジュースのカップが下に入ったパンの容器を一つずつお取りください。
密封されたものは中央にあります。それでは、主に祈りましょう。

1 Corinthians 16:21-24 Paul's love for a messy church

Today we are at the last message in First Corinthians. The Corinthian church had problems. That was evident throughout this book, and I want to walk through the book again to remind us of those problems. 10 verses into the first chapter, Paul begins to address the deep disunity in the body that seemed to exist in this church. He begs them to consider that Christ desires them to be unified around Christ. We see this in 1Corinthians 1:10. 10 I appeal to you, brothers,[a] by the name of our Lord Jesus Christ, that all of you agree, and that there be no divisions among you, but that you be united in the same mind and the same judgment. These disagreements in the church revolved around Apostles and church leaders and those who chose to identify themselves by their favorite church leader against those who followed other leaders. And as he draws that discussion to a close after 4 chapters, he transitions from a discussion of his own authority as an apostle to the next problem in the church – sexual immorality. 1Corinthians 4:21-5:2 says, 21 What do you wish? Shall I come to you with a rod, or with love in a spirit of gentleness? 1 It is actually reported that there is sexual immorality among you, and of a kind that is not tolerated even among pagans, for a man has his father's wife. 2 And you are arrogant! Ought you not rather to mourn? Let him who has done this be removed from among you. This was a serious problem, and although he would have liked to be gentle, he didn't mince words as he closed his discussion of this man committing immorality with verse 13 of chapter 5. 13 God judges[a] those outside. "Purge the evil person from among you."

Somewhat related to this discussion of tolerating sin in the church and disunity, he then addresses lawsuits among believers and then expands from the issue of the man committing sexual immorality to the issue of sexual immorality in general. 1Corinthians 6:18-20, says 18 Flee from sexual immorality. Every other sin[a] a person commits is outside the body, but the sexually immoral person sins against his own body. 19 Or do you not know that your body is a temple of the Holy Spirit within you, whom you have from God? You are not your own, 20 for you were bought with a price. So glorify God in your body. And then he gives the answer to sexual immorality within the institution of marriage. 1Corinthians 7:2 says, 2 But because of the temptation to sexual immorality, each man should have his own wife and each woman her own husband. In chapter 8, Paul begins a discussion, likely based on a question they sent him, regarding food offered to idols. It includes a focus on our rights and giving up those rights for the sake of Christ. His key thought in the discussion about himself is 1Corinthians 9:19-23 19 For though I am free from all, I have made myself a servant to all, that I might win more of them. 20 To the Jews I became as a Jew, in order to win Jews. To those under the law I became as one under the law (though not being myself under the law) that I might win those under the law. 21 To those outside the law I became as one outside the law (not being outside the law of God but under the law of Christ) that I might win those outside the law. 22 To the weak I became weak, that I might win the weak. I have become all things to all people, that by all means I might save some. 23 I do it all for the sake of the gospel, that I may share with them in its blessings. And his application to food offered to idols is seen as he draws his argument to a close in 1Corinthians 10:23-24 23 "All things are lawful," but not all things are helpful. "All things are lawful," but not all things build up. 24 Let no one seek his own good, but the good of his neighbor. So, the same selfish attitudes that lead to disunity in the church, can cause us to harm others with choices we make based on our desires and self-interest, even in small things like what we eat.

Chapter 11 in a way builds on that theme, by focusing on women wearing head-coverings in worship and eating the Lord's Supper together. The head-covering was about keeping the focus on Christ and not on any individual, and the same with the Lord's Supper, which is about proclaiming Christ and not some people's wealth over others. 1Corinthians 11:26 confirms this by saying, 26 For as often as you eat this bread and drink the cup, you proclaim the Lord's death until he comes. And this selfless service towards others culminates in a discussion of Spiritual gifts and how we use them to serve in the church. The high point of that discussion is 1Corinthians 13. Verses 1-3 tell us, 13 If I speak in the tongues of men and of angels, but have not love, I am a noisy gong or a clanging cymbal. 2 And if I have prophetic powers, and understand all mysteries and all knowledge, and if I have all faith, so as to remove mountains, but have not love, I am nothing. 3 If I give away all I have, and if I deliver up my body to be burned, but have not love, I gain nothing. And the end use of our gifts that are grounded in love for each other is that we worship in an orderly way that results in building up the church as a whole. 1Corinthians 14 ends the discussion this way. Verse 26 says, 26 What then, brothers? When you come together, each one has a hymn, a lesson, a revelation, a tongue, or an interpretation. Let all things be done for building up. Then in verse 40, But all things should be done decently and in order.

Finally, we come to chapter 15 that contains the last of the main issues Paul is dealing with as he refutes false teachers who say the resurrection of believers is false. The truth of our resurrection centers around the truth of Christ's resurrection. 1Corinthians 15:20-22 says, 20 But in fact Christ has been raised from the dead, the firstfruits of those who have fallen asleep. 21 For as by a man came death, by a man has come also the resurrection of the dead. 22 For as in Adam all die, so also in Christ shall all be made alive. Then after a series of greetings and instructions in chapter 16, we come to these final words that close this book in 1Corinthians 16: 21-24. **21** I, Paul, write this greeting with my own hand. **22** If anyone has no love for the Lord, let him be accursed. Our Lord, come! [23] The grace of the Lord Jesus be with you. [24] My love be with you all in Christ Jesus. Amen.

It's not unusual for Paul to close out his letters with words similar to this. It was standard practice at the time, that for someone like Paul who did a lot of writing in the course of his days, they would use an amanuenses, someone who would copy whatever he said, instead of actually doing the writing himself. And while it seems historically that this amanuenses could not write whatever he wanted, only what he was told by Paul, this final handwritten note from Paul was the equivalent of him giving his assurance that these were really his words. In Galatians 6:11, Paul points out how he writes in large letters. 11 See with what large letters I am writing to you with my own hand. Perhaps Paul's eyesight was bad which was a reason for his using an amanuenses. But whatever it was, his handwritten final note showed his stamp of approval on the letter as a whole. But it also did more. The words he wrote by his own hand told a message that he really wanted to convey to the readers. This final note by his own hand to the Corinthians has three key points. The first is actually a curse, If anyone has no love for the Lord, let him by accursed. Remember the messiness and sin that we recounted already in this book. The love for Christ is supposed to be what defines the church as the ultimate solution to church health. So, he uses strong language to address those who are losing sight of what is most important. He immediately ties in this first statement with the words, "Our

Lord, come!" He actually writes this using the Aramaic word, "Maranatha." The two are connected because at the Lord's return, he comes to judge. Living to serve out of love for the coming king and judge is the only way to truly live our lives with eternal purpose. That love for Christ means a longing for Christ's return. And the return of Christ should not paralyze us with fear but it should motivate us to serve Him.

But of course, as the Bible makes abundantly clear, we cannot begin to live our lives that way without the next statement that Paul makes. "The grace of the Lord Jesus be with you." Over and over the truth of Romans 3:23 becomes very clear... [that] all have sinned and fall short of the glory of God... And while we are created to bring glory to God by obeying him, and we are commanded to love him, we have all failed to do that. But Paul emphasizes over and over through his writing this word grace. God's undeserved favor towards us, his creatures, who sinned against him. And while this is his common ending to his letters to point to God's grace in the lives of his readers, we should never just pass over this reference. It's very easy to think of this in the same way we would close our letters today, such as "sincerely" or "yours forever" or "blessings" in Christian letters and emails. But grace defines Paul's life and grace should define our lives as a Christian. Look back at what he says in 1Corinthians 15:10 But by the grace of God I am what I am, and his grace toward me was not in vain. On the contrary, I worked harder than any of them, though it was not I, but the grace of God that is with me. If you have not accepted Jesus Christ as your Lord and Savior, then you are in need of God's saving grace today. The only way that we can truly love God and not be under his curse, is to experience his forgiveness that comes only by his grace. We can't earn it. We can't buy it. We only receive it by faith in Jesus Christ. Ephesians 2:8-9 says, 8 For by grace you have been saved through faith. And this is not your own doing; it is the gift of God, 9 not a result of works, so that no one may boast. It is God's grace that changed Paul, and it is God's grace that changes us and changes our church. No church, no person is spiritually healthy apart from God's grace in changing us and conforming us to his Son, Jesus Christ. And it is that changed life that results in love for God and love for others.

It is God's grace in Paul's life that leads to his final words to this church that clearly has a lot of problems. [24] My love be with you all in Christ Jesus. Amen. The reason I walked us back through an overview of the whole book first in this sermon, was to remind us of all the problems that Paul needed to address that made this church a messy church. It would have been very easy for Paul to simply wash his hands of this church or end this letter with harsh words of correction after all the problems he needed to address. The focus on grace at the end of his letters is very common, but this focus on love is unique. To this divided unhealthy church, he closes with words that show his deep affection for everyone of the believers who make up this church. This includes all those of the various factions dividing against each other. It includes all of those who may have been against removing the immoral man from the church. It includes women who may have rejected his instruction that they not violate social norms by uncovering their heads when leading in public worship. It even includes those whose doctrine of the resurrection was wrong and he had to correct. His love towards this church that may have deserved instead words of condemnation at the end, showed his heart behind the tough language he had to use in the book. His words were meant as a demonstration of love for this church and these people.

If you think about it, love has been a major focus in the book, culminating in chapter 13. Paul has been trying to say that loving others in the church is the primary fix for the problems in this messy church, and Paul reinforces his own words by expressing his love for them here at the end. He wants to show them by his own example that the church is a place for everyone, not just some, not just those who have perfect doctrinal beliefs, not just those who follow the correct apostle. Not just those who always make right decisions for the church, not just the leaders or the ones who have the most up front gifts in the church that everyone gets to see...but everyone should feel the love of Christ expressed within the Body of Christ. So, he closes with, my love be with you ALL. Amen. This is how a messy church becomes a healthy church, and glorifies Jesus Christ, the head of the church. Are we that church? Is YIBC a church that not only stands boldly for the truth of God's Word without reservation? But also expresses and lets people know that they are loved, they are cared for, and they are truly a part of the Body of Christ? May God make us that kind of church, for his glory, and keep us in that way until the day that Christ returns.

As we close this book of 1Corinthians and focus on loving each other, there is really no better way to close than by sharing in Communion together. This meal represents our unity that we find in Jesus Christ. We come from many different backgrounds, but at the foot of the cross, we are all the same. We are sinners in need of a Savior. Jesus Christ willingly shed his blood and died in our place so we could be one in him. We all come to God in the same way, through Christ's righteousness by trusting him as our Savior and Lord to find forgiveness for our sin. If you have accepted Jesus Christ as your Lord and your Savior and have been obedient to him in the first step of baptism, then I invite you to join us in this meal today. If you don't know Christ or haven't been baptized then I would ask you to refrain from partaking. Parents, you teach your children the significance of this meal by not allowing them to participate if they are not ready. After I pray, the Deacons will serve the elements from the 4 corners of the sanctuary. The cups are the same as last time with bread in the bottom cup with a juice cup inside of it. There are also prepackaged ones in the center rings. Let's go to the Lord in prayer.